

「融」

風流な大臣の幽雅でゆったりとした舞をお楽しみください

□世阿弥の作

- ・前シテ 汐汲みの老人（化身）
- ・後シテ 融ノ大臣（源ノ融）
- ・ワキ 旅僧

□概略

懐旧の涙に沈んだ汐汲みの老人だが、やがてありし日の風流な大臣（融ノ大臣）姿で現れ、月に照らされた河原の院でゆったりと舞を舞い興じた後、月の世界に帰るように消えて行くのでした。

□あらすじ

東国方の僧(ワキ)が都へ上って六条河原院に立ち寄った。時は秋で、ちょうど田子を担ってくる老人(シテ)に会った。聞けばこの辺の汐汲みだという。

ここは海辺ではないが、むかし融大臣（嵯峨天皇の皇子で源姓。左大臣）がここへ陸奥千賀の塩釜の景色を移し作って、難波の浦から毎日汐を汲ませて塩を焼いた。一だから汐汲みがいてもよいわけだ。

風流な源融はこうして一生をすごされた。と、貫之の古歌などをひいて話す翁は、昔とは変わってしまったこの所のうらさびた様を嘆き、懐旧の情に浸る。そして僧に問われ、近くの音羽山・清閑寺・今熊野・遠くは小塩山・松尾・嵐山などの名所の数々を教えたのち、池辺に汐汲みに出かけるような様子で。その姿は消えた（中入）。

僧がここに旅寝していると夢の中に、大臣が栄華を極め、曲水の宴を催した昔の景色がよみがえってきた。そして月下に大臣の昔に変わらぬ姿（後シテ）が現れる。大臣は曲水の宴に流れる盃の酒をうけ、ゆったり舞いを舞って楽しむ（早舞）。

月があれば星かげは淡く、春のはじめには遠山が霞む。黛のような形の三日月は、池に遊ぶ魚には釣り針に、また空を渡る鳥には弓に見えるかもしれない。そうした非常に豪華な眺望だ。

しかしさまざまな遊舞をしていた大臣の霊は、夜明けとともに淡く、なりそのまま月の宮へ帰るように消えていった。